

苧部 直

読まずにはいられない

「社会人」こそ、必読

自分の思いを伝える技法



『大学への文章学 コミュニケーション手段としての レポート・小論文』

渡辺哲司著

(1600円+税/学術出版会)

レポートや小論文をうまく書けない学生たち。その実態を「コミュニケーション」というキーワードのもと、深く探究し解決策を提示する

photo 写真部・関口達朗

大学に勤めていると、学生の文章能力について考えさせられることがしばしばある。たとえば皆で色紙に寄せ書きをするときなど、こちらが苦吟しているそばで、すいすいと気のきいた文句を書きこんでゆく。早くから電子メールでのコミュニケーションに慣れているから、短文を書くのは実に上手なのである。

しかしその同じ学生に、レポートや試験答案など、まったく長い文章を書かせてみると、とたんに拙いものになってしまう。自分の考えをゆっくり吟味し、それを順序だつた文章で他人に伝える訓練を、だいたいの学生は高校までに受けていないからである。もちろん、アドヴァイスを加えていけばかなり改善するのであるが。

この本の著者、渡辺哲司は、大学で実際に学生の文章指導にあたった経験をもち、現在は文部科学省に勤めている。これを読んで、これまで薄々と感じていた問題が、実はずっと深刻で重要だということ

に気がついた。文章で自分の考えをきちんと伝える技術は、たとえば会社員としてさまざまな書類を書くときに必須だろうが、その訓練を受ける機会が乏しいだけでなく、初等・中等教育における国語の授業が、むしろそれに反する性格をもって

いるのである。

たとえば、自分の思ったことを自由に綴らせるという作文指導。それが、子供自身の自発性を大事にするあまり、文章の「型」を身につけることを排除しているのではないか。また、文章の構成は「起承転結」とよく言われるが、自分の見解をストレートに述べるレポートの場合には、むしろ邪魔なのである。途中で視点を大きく変えることにより論旨を曖昧にしてしまうので、パラグラフを積みあげながら論理的に語る構成法とは、およそ反している。

いちおう、大学で学ぼうとする若い人と、彼ら彼女らを教える人のための本ではあるが、よくある文章マニュアルの類ではない。むしろ、言葉を用いて他者と交流する技法について多くのことを教えてくれる、「社会人」必読の一冊である。

かるべ、ただし1965年生まれ。政治学者・日本政治思想史。著書に『丸山眞吾の「録」のなかの「演明」』『歴史という皮膚』『安部公房の都市』『秩序の夢』など。